

生命倫理の難しさ

生命倫理は、最も学際的で専門的な議論が行われている応用倫理学の領域である。その問題はいずれも難問ばかりで、とくに個別ケースで言えばベストな解決策は困難である。医療の現実や社会の諸条件を勘案し、一定のガイドラインを満たした上で、ようやくベターな結論が出せるといった具合である。末期患者の延命治療はどこまで認めるべきか、臓器移植のドナーは誰がいつなるのか、代理出産は是か非か、是とした場合その条件はどのようなものか等々、これらの問題を少しでも考えてもみるとよい。医学・医療の分野のみならず、法学・倫理学・社会学、さらには経済学・人類学にまたがる知がそこに求められてこよう。ガイドラインが出来たとしても、思わぬ事態が発生すれば、せっかく立てた原則が揺らぐことも少なくない。コロナ禍の中、医療崩壊が起り、高齢者というだけで治療が後回しにされるといった事例などがそうだ。そうなれば、医療の公平性が確保できないことを覚悟しなくてはならなくなるだろう。

これら具体的・現実的な生命倫理の問題が、キルケゴールや実存思想を応用して直接解決できるかと言えば、それは不可能である。どんな哲学思想も、そのような応用のために理論が組み立てられているわけではない。また、応用倫理学とは銘打っていても、既存の哲学思想をそのまま現場に応用できるわけではない。(応用倫理学 applied ethics という名称がそもそも誤解の元なのである。) 哲学思想は、実践的な問題解決型ではなく、反省的な問題解説型の知のあり方を取る。それゆえ、生命倫理の問題をキルケゴールで解決することはできないが、この問題の本質をキルケゴールで読み解くことは可能なのである。むしろそのような読解作業は、生命倫理の問題を深く受け止めるために必要なのである。今回は、患者の自己決定という生命倫理の原則を取り上げて、このことを考えてみたい。

不条理を生きること

この問題を考える手掛かりとして、田村京子『生体臓器移植の倫理』(慶應義塾大学出版会、2020年)を紹介しておきたい。この本の副題は「臓器をめぐる逡巡と規範」である。生命倫理においては、なんらかの「規範」を求め、法制化を進める議論とは別に、生身の人間として「逡巡」する有様を押さえ、人間学的に深めていく議論も重要である。なぜなら、これがあるからこそ、「自分だったらどうするか」と考える当事者性の視点を確保できるからである。臓器移植の議論では、脳死の人からの臓器移植がよく取り上げられるが、最も多いのは家族や親族間における生体臓器移植である。この場合、臓器の提供者は、大なり小なり必ず「逡巡」する。そして、その中を自己決定していかなければならない。『生体臓器移植の倫理』は、この問題に十分目配りしつつ、倫理の語られ方にまで踏み込んで論じた好著である。

田村によれば、患者の自己決定という倫理原則は、功利主義からすれば、患者の治療効果も上がって望ましいものであり、義務論からすれば、結果の如何にかかわらず自己決定自体が善となる。そして実際、医療現場では治療効果の観点からも、患者の権利擁護の観点からも、患者の自己決定を受け入れている。

つまり、それだけ自己決定が、倫理学の学說的からも医療の現場からも基軸的な概念となっているわけだ。自己決定は実存思想の言葉で言えば決断となる。そこに問題が実存思想、そしてキルケゴールへと連結する接点が見いだされる。

不条理の中の決断

ただし、自己決定とは言っても、与えられた制約の中で可能な限りベストと思われる落としどころを見つけていくしかない。どんな決断をしたところで、不本意な部分はどうしても残り、結果としてはベターな選択にならざるを得ないだろう。生体臓器移植で言えば、健康な腎臓の片方や肝臓の一部は、もし何もなければ提供することなど決して考えられない。たまたま家族に臓器移植が必要になったので、提供するかしらないかを自己決定しなくてはならないのだ。引き受けることは重い、かといって断ることはそれ以上に重い。それは不条理としか言いようのない状況であり、この状況の下で自らが納得できる結論を出していかにざるをえないのである。

しかし不条理そのものについては、自分に与えられた運命として引き受けるしかない。人間とはそのような意味で *homo patiens* (受苦的人間) だと捉えたのは、独自の实存分析を唱えた V・フランクルであった。この不条理を受け止め、決断を下すということにおいて、ようやく実存思想に光が当たってくる。ただし、それはメタレベルでの議論である。実存思想それ自体、決して解決を導く処方箋ではなく、あくまで解説のための方法論として理解すべきなのである。

ヤスパースの表現を用いれば、不条理な事態とはいわば人生の暗号であり、我々は自らの人生の中でその暗号を解説していくことが求められる。不条理の背後に人の世の無意味さを見て、自らの力で意味を作り出そうとするのがニーチェやサルトルの目指す道である。不条理の背後に罪を見て、贖罪を通じて救済を得ていこうとするのがキルケゴールの取る道である。無神論的であれ有神論的であれ、どちらの道も実存思想の道であるが、それだけでは具体的な解決策を提示していないことを知るべきだ。どちらの道も、ひたすら人に問いを投げかけ、反省を深めるばかりである。「逡巡」はますます募るであろう。しかし、その中で下される決断は全人格的な重みを持つ。実存思想の狙いはここにある。

人間が生身の存在である限り、逡巡やためらいは必ず生じる。規範を設けたからといって、それらが解消されるわけではなく、決断は自分自身が下していかななくてはならない。いや、どんな医学的、法制度的、社会的条件が揃っても、その医療を選択するかしらないかは自分の決断次第である。そしてその決断において、人間がどこまで深く、どこまで主体的に、自らの命、自らの実存を受け止めたかが問われてくるのである。決断がそのように自分自身にかかっていることを自覚した時、我々は単独者としての自己を発見するだろう。その時、崖の上ただ一人だけで佇んでいるような恐怖と孤独を感じるかもしれない。しかし、ふと自分の傍らで、やはり一人立っている人間がいることにも気が付くだろう。その人間こそキルケゴールその人なのである。